対談

竹内　誠
江戸東京博物館・館長
×
福田　アジオ
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科・教授

図像資料から見た江戸のマチ

生活イメージの再構成―『熙代勝覧』の高い価値―

福田　今日は、江戸研究の中での図像資料・絵画資料の位置づけ、その成果についてお話を聞きたいと思います。

竹内　江戸研究の中で、都市景観論とか生活史や文化史が重視されるようになってから、絵画資料はいっそう重要性を増しています。文字資料からでは、なかなか立体的にイメージすることが出来ません。江戸研究上、絵画資料の代表は何といっても浮世絵ですが、絵画と文字の合体資料として従来いちばんよく利用されてきたのが『守貞漫稿』ではないでしょうか。本書の特に優れている点は、江戸と京・大坂との比較を図示・解説していることです。同じ便所の板扉でも、大坂の場合は下まであるが、江戸のは下の部分が風通しのよいように切ってあり、足が外から見えるようになっている。些細な生活史の一断面ですが、今村昌平監督の映画「ええじゃないか」を時代考証した際には役立った。

福田　『守貞漫稿』は三都の研究に欠かせませんね。

竹内　また、絵画資料ではありませんが、家の設計図作成に使用した大工さんの小道具が、江戸東京博物館に所蔵されています。薄い板で8畳の部屋、6畳の部屋とか廊下・便所・風呂場など各種の縮尺600分の1のパーツがたくさんあり、これを自由に並べ替えながら、これからつくろうとする家の設計図づくりをしたのです。江戸の職人のすごい知恵ですね。

福田　面白いですよね。定規で描くのとは違い、自由に組み替え、だんだん発想が豊かになっていく。

竹内　単純な小道具に見えても、建築の場合には、有用性がありますね。

福田　従来は、結果だけ見て立派な建物だとか、ここに工夫があるとか指摘してきたわけですが、建築のプロセスが考えられる。歴史研究も同じことだと思います。

竹内　最近発見された江戸に関する絵画資料の圧巻は、ベルリンの東洋美術館所蔵の『熙代勝覧』でしょう。江戸博開館10周年記念の企画展「大江戸八百八町展」の際、初公開されました。この絵巻は神田今川橋から日本橋までの江戸のメインストリートの賑わいと、西側に並ぶ90軒余の商店の繁昌するさまを俯瞰（ふかん）するように描いています。いってみれば日本橋繁昌絵巻です。これを仔細に見ると様々な発見がある。土蔵造りは、日本橋に近い方には多くて、離れるに従い少なくなる。三井越後屋はさすがに立派で、木綿店と呉服店両方とも他の家にはない雨樋がきちんと描かれている。家々の屋根の上に防火用天水桶があると従来は考えられてきたが無い。物干し台みたいな物見台、火の見が所々の家の屋根に見える。そこに必ず、風の方向を知るための風見鶏がある。芝居小屋とか火災の危険性の高い建て物は、天水桶を屋根の上に置いたようですが、一般の家の天水桶は、下の道路の脇に描かれている。

福田　（図を見ながら）確かにそうですよね。

竹内　今川橋から本白銀町（ほんしろがねちょう）、本石町（ほんこくちょう）、十軒店（じっけんだな）、本町（ほんちょう）、駿河町（するがちょう）、室町（むろまち）1～3丁目、品川町（しながわちょう）、そして日本橋へと克明に描かれており、町ごとに設けられた木戸の様子、木戸番

屋・自身番屋のあり方もはっきりわかる。

福田　今日なら写真などがありますが、当時、何を基礎データに描いたのでしょうか。スケッチはしたものですか。

竹内　していますね。家並み順が正確で、文献資料とも符合するところが多い。和泉屋、須原屋といった本屋、玉寿司という寿司屋もきちんと描かれている。

福田　絵巻の中に、多くの人々が登場しています。

竹内　数えてみると1,700人位。店舗・魚河岸の賑わいは無論、立売り、棒手振りの商人から辻占、乞食の様子、親に手を引かれ嫌々ながら寺子屋入りする子。鍋釜持っての引越の姿など江戸の貴重な風俗絵巻です。回向院の勧進僧の荷物に「文化二」と記されており、制作年代の参考になります。

福田　絵巻の制作意図は何ですか。

竹内　『熙代勝覧』という題名は、広く世の中が収まった時代の優れた景観という意味です。制作の意図は、この辺から推察できます。賑やかな町を簡単には見物できないかなり格の高い大名とか、一代の繁栄を豪商が描かせたとか、いくつか説があるようです。なお今回発見されたのは「天」の巻ですので、ほかに「地」の巻（さらには「人」の巻）があったはずです。これらが発見されれば、江戸のマチの研究はより豊かなものになるでしょう。

福田　「地」の巻が発見されたら、どの辺が描かれていると思われますか。

竹内　「天」の巻の続きですから、日本橋より南の京橋・銀座へと描かれているとか、逆に今川橋から北へと描かれているとか、いや「天」の巻の反対側、つまり今川橋から日本橋までの東側の町並みが描かれているなど、さまざま推測されています。最後の場合ですと、オランダ商館長が江戸参府の際に定宿とした長崎屋と、そのすぐ裏手の時の鐘が描かれている楽しみがあります。

福田　「地」の巻の発見が待ち望まれますね。

竹内　絵画資料は非常に重要ですが、利用する際に十分資料吟味をする必要があります。かつて教科書にも載った江戸の町の中を行く、朝鮮通信使の行列の実景とした絵は、実は天下祭の際の練り物で朝鮮通信使一行を真似た仮装行列だったんです。駿河町の通りの場面で、両側に桟敷をつくって緋毛氈を敷いて大勢の人が見物している。お祭り見物だったんですね。

福田　見る方は期待する面があるから、どうしてもその視点から見てしまう。

竹内　創作が加わり危ないのは寛永期の『江戸図屏風』、『江戸名所図屏風』です。『洛中洛外図屏風』と同じでね、実景とは限りませんからね。

『江戸図屏風』『江戸名所図屏風』の世界

竹内　家光の権威の顕彰が町方まで行き届いている『江戸図屏風』の秩序立った描き方に対し、『江戸名所図屏風』は江戸の町の喧騒と賑わいを活気あふれる形で描いています。二つの比較は面白い。

福田　城の中まで、俯瞰していますね。

竹内　『江戸図屏風』は江戸城の全貌を描き、朝鮮通信使の登場の場面とか、品川沖の軍艦の観閲式とか家光の威光を示しています。

鹿狩や鷹狩の場面でも日傘に入り顔を見せず、唯一ポロのような場面で家光は顔を出す。その多くは将軍の存在を明示せず暗示させる描き方です。もうひとつ、出光本の『江戸名所図屏風』では、町から見た江戸城しか描いていない。城内を描いたら、多分、処罰された。

福田　『江戸図屏風』の場合は江戸城を上から見ていますよね。

竹内　『江戸名所図屏風』の方は下から見ています。町方

「熙代勝覧」に描かれた町の賑わい
『江戸開府400年・開館10周年記念　大江戸八百八町展』
（江戸東京博物館　編集・発行）

の立場で歓楽街・浮世風呂など江戸の喧騒が描かれている。一方の『江戸図屏風』は、城中の全機構が分かるような描き方です。めったやたらに誰にでもみせるものではなかった。魚河岸は両方とも描かれているとか、町並みの角屋敷には三階に銃眼が開けられ、狙撃できる櫓が描かれるなど共通項があります。建設途上の江戸の町の軍事都市的な側面がうかがえます。

福田　『江戸図屏風』の制作年代をめぐっては議論がありますね。

竹内　船印・船の形を根拠にする石井説が出されていますが、それよりも対照的な両者を比較検討し、寛永期の江戸社会を理解する絵画資料としての扱いが大事です。日本橋の高札場の場面で『江戸図屏風』の方は、人々が高札を見上げ読んでいるのに対し、『江戸名所図屏風』は誰も読んでない。二つの屏風の性格を象徴する場面だと思います。『熙代勝覧』にも日本橋の高札場が描かれているが、拡大すると高札の字が全部読める。

福田　米に字を書くようなものですね。ところで、図像資料から江戸の町の変遷は辿れますか？

竹内　図像資料も重要ですが、変遷といえば江戸考古学の発達に期待しています。東京の地層は、30cmほど掘ると東京大空襲、その下30cmが関東大震災、さらに掘ると安政の大地震、3メートル以下が明暦の大火の焼け跡です。一ツ橋高校遺跡の遺物からは近世の日常生活がわかる。煙管などは時代的変遷までわかります。

福田　図像の場合、同じ場所が経年的に描かれればよいのですが、そうはいきませんからね。

竹内　日本橋の町並みは享保頃だと、多分白壁が続いていた。しかし、化政期頃には黒塗が流行り、幕末には黒壁の通りだった。

福田　柳田国男が白壁は関西のもので、東は緑だといっている。緑は壁ではなく、屋敷森。ただし農村部のことですが。

竹内　江戸の町は京を真似ていますから当初は関西風だった。同じ黒でも板壁か土壁までは分かりません。絵画から変化が追えれば、面白いですよね。

福田　考古資料も最初は文字資料の追認であった。今は違い、文字資料に出てこないものが発掘で出てくることに意義がある。絵画資料でも同様なことがいえます。ところで、『江戸名所図会』のように大量に印刷された絵の価値はどうなのでしょうか。

竹内　その価値は極めて高いですよ。安永9年（1780）刊の『都名所図会』を齋藤月岑の祖父幸雄が見て、『江戸名所図会』の編集を思い立ち、父の幸孝そして月岑の三代で作った。

福田　技法とか描く対象も似ていますが、地域差も認められる。記述も結構詳しいですね。

竹内　その通りで、江戸のガイドブックとか土産になった。挿絵を画いた長谷川雪旦は『江戸名所図会』だけではなく、芭蕉の奥の細道や信州を訪れ画筆を振るっている。

“素人絵”―江戸の図像作者―

福田　職業的絵師の描いた絵以外に旅日記などに素人の描いた絵が残されています。そうした絵心はどこで学んだのでしょうか。

竹内　狩野派の師匠は町の中に意外と多くいて、個人教授をしていた。

福田　稚拙だけれども、侍でも町人でも、文字で書けなければ、絵で描こうとした。渡辺崋山だとプロに近い。

竹内　ここに持参しましたのは、尾張藩の家老、石河家の御家人の描いたものの写しです。石河権右衛門が領地巡検の折に描かせた『在所絵日記』です。弘化3年8月28日から9月15日まで総勢50人位の旅です。乾・坤と二冊で、文字は何々するところという注釈がある程度で、あとは全て絵で説明しています。登場人物全ての似顔絵が描いてある。自信がないのか、そこに名前が書き加えられている。御用人の石河権右衛門だけはまじめな顔で、あとはもう毎晩の宴会での乱痴気騒ぎのどうしようもない状況が描かれている。明らかに専門の絵師が描いてい

福田　アジオ
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科・教授

対談

るとは思えない。

福田　今まではどうしても絵師の描いたものばかり注目してきた。

竹内　（図を示しながら）初めから終わりまで酒飲みのシーンの連続、あとは花火や相撲や豊年祭の獅子舞見物など遊びのシーンが多い。これが侍の旅のあり方ですかね。

福田　これは木曽川で河原遊びをしているのかな。あまり風景は上手くない、人物画の方が面白いですね。でも、よくまあ飽きもせず描きましたね。

竹内　よくまあ飽きもせず飲んでいる。（笑）

福田　この絵を誰が描いたかのサインはないですね。絵の素人が自身の経験とか観察に基づき描いた絵画を「素人絵」と名づけて分類すると、素人絵からは等身大の生活がわかる。今後、旅日記とか絵日記に記載された素人絵を絵画資料としてさらに発掘、研究する必要があります。

江戸の音・色・匂い―五感の社会史―

竹内　江戸の物売りの声の録音版が市販されています。たとえば私が昭和10年代、子供の頃、毎朝聞いた行徳あたりから来る蜆売りの声と同じですが、江戸時代の売り声にまで遡れるかどうか。学問的根拠には疑問がある。定齋屋の売り声などもなつかしい。

福田　戦後、私が子供の頃に来た納豆売りの声などを覚えています。定齋屋とは？

竹内　箪笥状の四角い箱を担ぎ、「えーじょさいやでござい」と暑気当たりの薬を売りにきた。わざわざ、日向を歩き効能を示した。物売りの声はいろいろ聞いていますが、近世以来続いてきたものかどうか。

福田　五感で歴史を捉えられるかですね。

竹内　物売りの声が朝昼晩違う。蜆売りは朝飯前に、金魚売りは夏の昼下がり、一日で音の違いがあった。四季折々でまた違う。鰹売りは威勢のいい若者が来る。ただ、音を具体的に聞かせろと言われたら困る。

福田　文字で記録した音と、伝えられてきた音を照合することは可能でしょうか。

竹内　文献にあるからというのも危ない。江戸時代にはかぎ括弧はないから。（笑）

福田　匂いはもっとだめですね。言葉からはどんな臭さかわからない。

竹内　江戸東京博物館は体験型博物館で、纏をかざすとか、人力車に乗る、千両箱を持つなどの体験ができる。

竹内　誠
江戸東京博物館・館長

江戸の資源リサイクル理解に必要と、臭い付きの肥桶担ぎを学芸員から提案された。肥桶は許可しましたが臭いは不許可です。（笑）

福田　そこまでいくと、本当に実感ですね。

竹内　今はやめたそうですが、宮城県の東北歴史博物館では駄菓子屋さんに入ると甘いキャラメルの匂いが出るようにした。

福田　音もそうですが、匂いの問題は、展示の範囲内にとどまってくれないことですね。

琵琶湖博物館ではうんちの展示をしました。食べ物によって臭いも色も違うのだから、展示するならそこまで徹底しないと。（笑）

竹内　江戸の人々の色彩感覚もすごい。鼠色だけでも何種類もある。しかし、色は残るから近づきやすい。十八大通などの通人が好んだ色はぞろーっとした黒です。粋な色というと、灰、茶、青の三系統。色や柄は時代によって流行がある。

福田　寛永期くらいまでの傾（かぶ）き者の好みはどんなものですか。

竹内　絵を見ると桃山風の大柄で粋じゃない。刀の鞘は、派手な朱塗りです。えらい派手な男が現れたと思われたでしょう。

福田　それが粋に転換するのは、いつ頃からですか。

竹内　18世紀後半、しかも江戸です。上方では、「すい」と言った。粋（いき）もいろいろな漢字で書きます。文学作品では、好風とか好雅と一字必ず好むを入れ、その横に「いき」とルビが振ってある。粋というのは相手に不快感を

与えない。好もしい言動とか身なりとかが基本にある。

福田　なるほど、自分が好むのではなく、他人に対して好ましい行い。

竹内　粋は、他人を前提とした美意識です。元禄時代ではなく田沼時代、18世紀後半、江戸文化が栄え始め、江戸っ子という意識の形成とも関係する。

福田　元禄期はどういう状況ですか。

竹内　前代の傾き者の延長線で伊達、気負いです。その代表が坂田藤十郎の世話物、和事に対する市川団十郎の荒事。一種の男伊達のスタイルを舞台上に形式化して出した。

福田　粋の文化の中、団十郎的なものは近世の後期になるとどうなるのですか。

竹内　それは伊達の系譜を引くのです。九鬼周造が定義した粋、つまり垢抜けして、張りのある、色っぽさのうちの洗練された「張り」です。

福田　垢抜けして粋になるわけですか。

竹内　正義感に燃えるような、張りだけでなく、他人を前提とする粋では、色っぽさが求められる。他人の多くは、異性ですが、男同士も女同士もあった。

博物館展示と文字・非文字資料
―文字解説は必要か？―

福田　博物館の展示と文字・非文字資料の関係について、館長の立場からの考えをお聞かせください。

竹内　歴史博物館ですから平物の文字資料が基本になりますが、立体的な展示を心掛けています。その折、歴史考古学資料の成果は有り難かった。絵・文字資料もある大名屋敷の展示に発掘資料が加わり、生活実態が復元できた。近世考古資料だけではなく、近代考古学の成果も、汐留や銀座から出土した実物を展示しています。

福田　銀座の煉瓦街などが実感できますね。近世文書の展示はどのように？

竹内　たとえば将軍・家茂の書簡や孝明天皇の宸翰はそれだけでも価値があります。しかし、展示意図の解説文と釈文と現代語訳は必要です。全訳は大変で、重要な箇所に矢印をつけ、線を施し訳すようにしています。

福田　関心を持ってもらう点でもひとつの方法ですね。先日、江戸東京博に行った時に、同行者にここの解説文は長すぎると言ったら、近づいてこられたボランティアの解説員はこれでも解説が少ないと言っていた。

竹内　解説板の字を大きくする指示を出したので、新しい解説板から字数は制限されています。題名だけ付けて、スポットを当てる考え方もあります。しかし芸術品とは違うから、きちんとした解説はした方がいいと思う。

福田　上野の東博も変わってきましたが、相変わらず基本は立ち止まって一点一点見る展示法です。江戸東京博や佐倉の歴博は、ストーリーとして、全体を理解する展示を志向する中で、文字によらない方法があるのでは？

竹内　学芸員の研究成果、資料を分析したものを、グラフなどの形で、実物に添えて展示する。下手な解説より資料から何が言えるのかが分かる。常設展示では、文字でない分析データのパネル板が、実物とともに展示されているかいないかで館の実力が分かります。

福田　結局、展示の解説は結論的なことを書いてしまう。それより資料から導き出される問題点や研究の手の内を学芸員が明らかにすることが大事だと思います。

竹内　実物だけ出しておけばと豪語する人がいますが、今の時代の博物館では不親切ですね。

福田　江戸東京博だと巨大な再現模型・実物模型があり、圧倒されます。

竹内　本来は、野外に濠を掘り、船を浮かべ、日本橋を架け、橋詰には高札場を立てる計画でした。橋詰に中村座を作り、照明は百目蝋燭で本格的な江戸歌舞伎を見せようと、団十郎さんにも許可を得た。それが屋内展示に変わり、30メートルの高さを埋めることになった。日本橋も江戸時代と同じ材料を使って実物大に復元しましたから、バーチャルリアリティで体験できる。

福田　歴博が歴史展示の方向性を作りましたが、江戸東京博はさらに地域を限定して特色を出した。近・現代展示も生きている感じがしますね。

竹内　残念ながらオリンピックで現代の展示を止めました。交通戦争とか隅田川の汚染などの展示表現が難しかった。

福田　その点、知事以下の固有名詞がないのはユニークです。地域限定のところで固有名詞をあげないのは勇気がいる。

竹内　江戸東京庶民の歴史ですから、固有名詞はほとんどない。誰を挙げても問題です。遠山の金さんを挙げると、大岡越前守をなぜ挙げないのかということになる。長谷川平蔵だっているじゃないかと。そこで固有名詞をなるべく使わないことにした。

時代考証のウソとマコト

福田　大岡といえば、「北町奉行所」の看板は実際はないわけですね。テレビドラマなどの時代考証をなさっていますが、時代考証の基準はありますか。

竹内　ストーリーについては創作ですからいじれません。佐久間象山、吉田松蔭、近藤勇がいっせいに黒船を遠眼鏡で見る、吉良上野介が大石蔵之助に茶会の招待状を送る、大石の切腹前に将軍綱吉が会うことなど史実としてありえませんが、テレビ番組では要求される。それなら、綱吉が水戸ご老公に扮して会いに行き、大石は一目見て悟る設定ならよいのかと。結局はストーリーを変えると大喧嘩になる。

福田　すごいことですね。(笑)

竹内　ただし、江戸時代の物事の基本的なあり方は絶対に譲れません。例えば、横に「松前屋」なんて書いて正面に掛ける看板はない。通りの構造から、横に出ていなければ看板にならないのです。「津軽藩下屋敷」などの看板もなかった。テロップでの説明を勧めても、テレビドラマはテロップを嫌います。

福田　テレビでは横の構図を欲しがるでしょう。

竹内　居酒屋の机で向い合い、差しつ差されつする場面はおかしい。料理屋でも水茶屋でも、緋毛氈に横座りになり、銘々膳・箱膳やお盆が実際です。テーブルを利用して飲食するのは長崎の卓袱料理から、ちゃぶ台は大正時代からですね。

福田　時代劇の場面ではよく出てきますね。

竹内　横座りではテレビの絵にならない。苦肉の策で、机の真ん中に炉を切って鉄瓶を吊り下げ、囲炉裏風にし、斜向かいに座らせたりしました。お銚子ひとつの形にしてもその考証は難しい。棒手振りが天秤棒を置くときの紐の引っ掛け方とか、ずいぶん細かいところまで目を光らせました。

福田　折角、苦労して考証した事物でも、その後いつのまにか消えてしまうものもありますね。

竹内　それから言葉です。江戸時代にない言葉はできるだけ使わないようにしました。「これから連絡を密にして」の「連絡」はない。「そういう責任がある」とか、「お前の義務だ」の、「責任」とか「義務」もない。言い替えが難しい。義務に対しては「責めを負う」という言い方を考え出した。「ミイラ取りがミイラになる」という台詞があり、ありえないと思ったら、江戸時代の初めからある。『日葡辞書』に出ているのです。予想通り、放送後にクレームの電話がひっきりなしに鳴る、しかし、調べてあるので対応は万全です。それ以後、電話が鳴るような考証は、本当でもやめようと。(笑)

福田　それが無難というところですか。

竹内　江戸時代にある言葉を使うように随分喧しく言いました。脚本直しは、一番それが多かったですね。それともうひとつ、大石内蔵助が吉原通いの折り、土手八町に並んだ露店に二八蕎麦の看板があった。二八蕎麦は元禄以降ですので、すぐ消させました。おかしいのは、傘張り浪人が大晦日に、米屋などの支払いを済ませ、晴れ晴れとした気分で、長屋の裏庭に出て空を見上げると雲の間から満月、というよくある場面。演出家にすれば、「ああ良かった」などと語らせないで、浪人の心象風景を表したい。江戸時代は旧暦だから晦日に月が出ているのはおかしいと指摘すると、その光景を残念そうに取り止めます。私も、それはすごく辛いことです、やりたいところだから。(笑)

歴史研究における非文字資料の価値と可能性

福田　このプロジェクトに対するご意見をお聞かせください。

竹内　歴史研究上の問題として、文字資料だけでは限界があると思います。幕藩体制の仕組みとか枠組みを問題にしている分には差支えがないのですが、たとえば、江戸城内の儀礼を扱う場合、文字資料では立体化とか形象化ができないのです。将軍にお目見えするとき、城内の廊下をどのような順路で進み、広間では畳のどの位置に座るのかが絵図では点や線で示されています。将軍権威の家来に対する序列化の実態が具体的に分かるわけです。文字資料からだけでは制度面と実態をつなぐことはできない。所謂絵画的な非文字資料の存在は知ってはいても、分析はしてこなかったし、問題意識もなかったから、積極的に利用はしてこなかった。絵画資料をはじめ非文字資料を利用しての歴史研究はそのとば口にあり、可能性は非常に開かれていると思っています。

福田　大変勇気づけられる結論をいただき有難うございました。

(2004年11月17日　COE共同研究室、聞き手：佐野賢治　記録：関ひかる、中町泰子)